

温暖化は止まらない



CO₂の排出に起因する人為的な地球温暖化の大部分は、数百年から千年規模の時間スケールで不可逆である。(26頁)

地球温暖化の特徴の大部分は、たとえCO₂の排出が停止したとしても、何世紀にもわたって持続するだろう。人為的なCO₂の排出が完全に停止した後も、何世紀にもわたって、地上気温は高いレベルでほぼ一定のままとどまる。(25、26頁)

濃度シナリオによって違いはありますが、排出されたCO₂の約15～40%は、1000年以上大気中に残るとされています。このことは、温暖化はいったん起こってしまうと止めることが極めて困難なことを意味しています。

2℃未満に抑制するには

温室効果ガスの継続的な排出は、**見本**温暖化と気候システム全ての要素の変化をもたらすだろう。地球温暖化を抑制するには、温室効果ガス排出量の大幅かつ持続的な削減が必要である。(17頁)

平均気温上昇を工業化以前から2℃未満に抑制するためには、世界全体の温室効果ガス排出量を現状に比べて2050年までに半減し、21世紀末には世界全体の温室効果ガス排出量をゼロにする必要があるとされます。

日本政府は増加目標の撤回を！



COP会議

これまでの国際交渉で、工業化以前に比べて地球の平均気温の上昇を2℃未満に抑制するために、各国は温室効果ガスの排出量を大幅に削減すること、そのために各国が緊急に行動をとるべきことが合意されています。

地球温暖化問題についての国際交渉では、2012年から、すべての国（先進国も途上国も）が参加する2020年以降の新たな枠組み交渉が始まり、2015年に合意する予定になっています。また、2020年以降だけでなく、2020年までの削減

目標についても、できるだけ現在の目標を高くする交渉も行われています。

ところが、日本政府は、2013年11月に、国際公約になっていた2020年25%削減目標（1990年比）を撤回し、2020年3.1%の増加となる新たな目標を発表しました。

地球温暖化が「過去、現在、及び将来のCO₂の排出によって既定される」ことを考えれば、世界有数の温室効果ガスの排出国である日本が増加目標をかかげることは、将来世代に対する背信行為です。日本政府は、科学の警告を真摯に受け止め、2020年増加目標を撤回すべきです。

濃度シナリオ (RCP シナリオ)



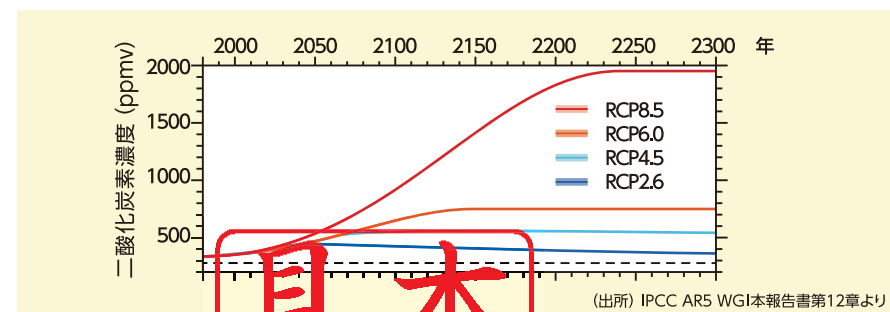
AR5は、温室効果ガスの削減を前提に、その「濃度シナリオ」を用いています。具体的には放射強制力^{※1}で表された、代表的な4つのシナリオで検討していて、放射強制力が、8.5、6.0、4.5、2.6の4つのRCPシナリオ^{※2}で予測を行っています。(27頁)

RCP8.5 (高位参照シナリオ)：2100年以降も放射強制力が上昇。

RCP6.0 (高位安定化シナリオ)：2100年以降に放射強制力が高位で安定化。

RCP4.5 (中位安定化シナリオ)：2100年以降に放射強制力が中位で安定化。

RCP2.6 (低位安定化シナリオ)：2100年までにピークを迎えその後放射強制力が減少。



評価の方法

評価報告書では、「可能性」と「確信度」という2つの評価がされています。「可能性」は定量的な可能性を確率的に9段階で評価しています。「確信度」は、定性的な、「証拠」の量や、「意見の一致」の程度によって5段階で評価しています。

可能性の表現 (2頁注2)

用語	発生確率
ほぼ確実	99～100%
可能性が極めて高い	95～100%
可能性が非常に高い	90～100%
可能性が高い	66～100%
どちらかと言えば	50～100%
どちらも同程度	33～66%
可能性が低い	0～33%
可能性が非常に低い	0～10%
可能性が極めて低い	0～5%

確信度の表現 (2頁注1)

確信
非常に高い確信度
高い確信度
中程度の確信度
低い確信度
非常に低い確信度

※1 1m当たりの放射エネルギー (W/m^2) の値で、気候を変化させる影響力の尺度として用いられます。CO₂濃度や太陽の活動などによって変化し、正の数値が大きいほど温暖化の寄与が大きくなります。(負の値は寒冷化)

※2 代表濃度経路 (Representative Concentration Pathways) の頭文字をとってRCPシナリオと言われ、後ろの数字が放射強制力の値になります。